

義教と日蓮宗・法華宗學僧との論争——修行論を中心に——

庵 谷 行 遠

一 はじめに

近世の日蓮教學史に對する主たる研究として、望月歎厚氏、執行海秀氏の業績が擧げられる。これら諸氏の研究は、宗學あるいは教團史の立場からの考察であり、日蓮門下の學僧の文献からの見解を記している。すなわち、主だった學僧の文献に基づいて各學僧の主張を列擧し、教學史としている。

ところで、日蓮教團の歴史では、他の宗派との宗論が繰り返された。近世に入ってから、その宗論は益々激しくなり、口答でのいわゆる口論ではなく、著作物によって論戰を繰り廣げた。したがって、記録として今に傳わるものもあり、研究の對象として紐解くことができる。

義教と日蓮宗・法華宗學僧との論争 — 修行論を中心に — (庵谷)

本稿では、日蓮門下の學僧の視點と、宗論の相手となった義教の主張を研究の對象とする。すなわち互いの反駁を精査することを手掛りとして、既存の宗學的觀點からの分析とは異なる見地から、その内容分析に取り組むことを目的とする。

また、執行海秀氏は『日蓮宗教學史』において「當時のわが教學は、徒に權實・本迹の教判のみに終始し、教理の内容や實踐面等の宗旨の本義については看過されていた。」と評している。執行氏の評言について、本稿において「閑邪陳善記」・『決權實義』の記述を基に修行論を中心に考察を加える。

二 論争の趨勢

本稿で取り扱う論争の關係については、先行研究によれば

次の通りである。⁽²⁾

論争の端緒は、貞享元年（一六八四）七月、眞宗の夢傳（生没年不詳）と日蓮宗の學僧が肥後國本成寺（現熊本縣八代市）⁽³⁾において問答をしたことである。その時の記録が『邪正問答』二卷（貞享元年（一六八四）刊行）として記されている。稻田海素稿「日蓮宗宗論書解題」の「邪正問答」の項には「貞享元年七月、眞宗の夢傳と問答せしを某士記録せしものにて貞享元年八月の刊行なり」との記述がある。また、山口晃一編『日蓮教學全書』宗論部一四所收の版本奥書には「貞享元年甲子八月上旬八 新發心某誌」とある。さらに、『日蓮教學全書』續宗論部卷一所收の版本奥書には「八月上旬日□新發心某誌□貞享元年甲子九月中旬吉辰□銅駝坊書林平樂寺村上勘兵衛梓行」とある。ところで、『日蓮宗事典』「日曉」の項には「字は淵海。（中略）彼は貞享元年（一六八四）『邪正問答記』二卷として著した。」と解説している。

この『邪正問答』に對し、淨土宗からは乘譽（生没年不詳）と松譽（生没年不詳）の二名の學僧が反駁を加えた。乘譽は『増上緣談義咄』五卷（寶永四年（一七〇七）刊行）を著し、松譽は『翻迷開悟集』五卷（正徳三年（一七一三）刊行）を著した。『翻迷開悟集』については、『日本佛敎典籍大事典』の『翻迷開悟

集』の項に、「四卷三冊。沙門松譽（生没年不詳）述。本書は江戸中期の鎮西派の學僧であつた著述者が、京都の日蓮宗蓮久寺淵海の著した『邪正問答書』二卷を難破會通したもので、正徳二年（一七二二）の自叙がある。」という記載がある。『日蓮宗事典』「日曉」の項では、蓮久寺は一音日曉が住していたとされ、『日蓮宗寺院大鑑』⁽⁹⁾によれば一音日曉が中興開基した寺院と傳えられている。

蓮華日題（一六三三—一七一四）は乘譽の『増上緣談義咄』に反論するために、『閑邪陳善記』五卷を著した。述作の時期については二説が確認できる。

『日蓮宗宗學章疏目錄改訂版』では、著作年月を元祿五年（一六九二）としている。同様の説として『日蓮宗事典』「日題」の項に「元祿四年（一六九二）日題は京都より追放された。時に五九歳であつた。しかし翌五年には『閑邪陳善記』五卷を著して乘譽の『増上緣談義咄』を破し」と記されている。これによると、蓮華日題が『閑邪陳善記』を著したのは元祿五年（一六九二）ということである。乘譽の『増上緣談義咄』五卷の成立を『國書總目錄』に従つて寶永四年（一七〇七）とすれば、年代の順序に矛盾が生じ、『日蓮宗事典』の記載は不當となる。一方、『日本佛敎典籍大事典』の『閑邪陳善記』の項に

は「寶永五年仲冬に述作し翌六年開版された⁽¹²⁾」と記述されている。版本『閑邪陳善記』冒頭には日題が記した序があり、「維時寶永五年戊子仲冬⁽¹³⁾」とある。また奥書には「寶永六己丑稔晚槐令辰⁽¹⁴⁾」⁽¹⁴⁾「雒城書鋪⁽¹⁴⁾」栗山宇兵衛板行」という記載が確認できる。よって本稿では、『閑邪陳善記』は寶永五年（二七〇八）に記され、翌寶永六年（二七〇九）に刊行されたものとする。

大心海義教（一六九四—一七六八）は越中圓満寺に住した浄土眞宗本願寺派の學僧であり、西本願寺第五代能化である。⁽¹⁵⁾『浄土眞宗論客編』は日題・眞言宗の空遍による眞宗批判に對して反駁した著書とされ、元文三年（二七三八）の成立である。後に觸れる⁽¹⁶⁾『輪駁行藏錄』の緣起には、『浄土眞宗論客編』は金橋寺千手寺の空遍の『禪客驚徒破會評決』を駁す爲である旨が記されている。

『浄土眞宗論客編』に對して反論した書は『決權實義』である。本書の著者については後に考察するが、先に結論を示せば、富山縣黒瀬谷法華宗陣門流本法寺十八世、光圓日相（一六八八—一七五六）の著作である。『決權實義』は元文五年（一七四〇）に記され、寛保元年（一七四一）に刊行された。中心となる論旨は、『浄土眞宗論客編』における「法無權實、權實在

義教と日蓮宗・法華宗學僧との論争 — 修行論を中心に — (庵谷)

機⁽¹⁷⁾」という記述に對する反駁であり、權實論を展開している。さらに『決權實義』へ反駁した著書は『輪駁行藏錄』五卷である。本書冒頭の緣起には「寛保癸亥季秋日⁽¹⁸⁾」とあることから寛保三年（一七四三）に記されたことがわかる。なお、『眞宗人名辭典』は『輪駁行藏錄』の成立時期を寛保年間（二七四一—四三）としている。

『輪駁行藏錄』の題號釋については、先の緣起に次のように記している。

義出乎吾二人之說、而文成乎爾二三子之手、則謂之輪駁錄一歟。且爾輩當知。若有益於時事、而不獲已、則行諸世。否則藏諸爾篋、勿漫示人也。因併命曰輪駁行藏錄一而可也。⁽²⁰⁾

内容は二人の說、すなわち西光寺の芳山律師と圓満寺義教との兩師の說を採り入れ、兩輪の如く論駁したので「輪駁錄」と名づけ、時事に適うならば世に行じ、そうでないならば箱に閉まって納めよ、という趣旨から『輪駁行藏錄』というのである。

以上の論争の流れにおいて、次に個々の主張について検討する。

三 蓮華日題著『閑邪陳善記』における修行論

義教と宗論になつた直接の相手として、まず蓮華日題がい
る。その著書『閑邪陳善記』における修行について検討する。

『閑邪陳善記』卷二には次の記述がある。

法華經ノ第一卷方便品ニ云ク、諸佛本誓願、我所行佛道、
普欲令衆生、亦同得此道ニ云云。此ノ文ノ意ハ、十方
三世ノ諸佛ノ本誓願ハ、我が所行ノ佛道ヲ、普ク一切衆
生ニコレヲ修行セシメテ、我ゴトク同ク佛道ヲ成ゼジメ
ント誓ヒ給フトナリ。其我所行ノ佛道ト云ハ、諸佛道同
ノ諸法實相唯一佛乘ノ妙法ナリ。則法華經ノ結經普賢觀
經ニ佛三種身從此經生ト説キ、涅槃經ニ諸佛所師所謂法
也ト演給ヘルハ是ナリ。然レバ諸佛ノ三身ト云ハ法報應
ノ三身ナリ。此三身ハミナ法華經ヲ師匠トシテ修行シ給
ヘル故ニ得給フトコロノサトリノ妙體ナリ。故ニ我が修
行シテ證得セシゴトク、普ク一切衆生ヲモ我ガゴトク修
行セシメテ、同ク佛道ヲ成ゼシメントノ本誓願ナルコト
明白ナリ。是則佛々道同ニシテ更ニ異路アルコトナシ。

このように『法華經』方便品(五佛章の中、未來佛章)⁽²⁰⁾の經說
に基づいて、佛が修行し悟りを得たことを先蹤として、一切

衆生にも同じく修行し佛道を成ぜしめるとの本誓があること
を明示する。そして衆生の修行が佛々道同・五佛道同の修行
であることを説示する。

ここに引用される『普賢觀經』は「此方等經是諸佛眼。諸
佛因是得具五眼。佛三種身從三方等生。是大法印。印涅槃
槃海。如⁽²³⁾此海中能生三種佛清淨身。此三種身、人天福田、
應供中最。」とある箇所が典據と考えられる。また『涅槃經』
卷四(南本)四相品には「復次迦葉。諸佛所師所謂法也。是
故如來恭敬供養。以⁽²⁴⁾法常故諸佛亦常。」という經文がある。
そして、『普賢觀經』と『涅槃經』を根據に、この三身はみ
な『法華經』を師として修行した故に得ることができた悟り
の妙體であると解釋し、したがって『法華經』方便品の經說
の通り、衆生の修行は佛々道同・五佛道同の修行であると理
解するのである。

ところで、『法華經』の功德と稱名とを比較している記述と
して『閑邪陳善記』卷二には次の記載がある。

法華經ノ眞文ニモ提婆達多品ヲ聞テ淨心ニ信敬スルモノ
ハ、是ノ功德ニコタヘテ未來世ノ善男・善女・人天、勝
妙ノ果報ハ云ニ及バズ。生十方佛前蓮華化生トテ十方ノ
佛ノミマヘニ生レ、蓮華化生セント説給ヘリ。(中略)一

且(且カ)聞品ノ功、アニ常念稱名ノ行ヨリ易行ナルニ非スヤ。⁽²⁵⁾

ここでは、『法華經』提婆達多品における、聞法の功德により十方の佛前に生まれ、蓮華より化生するとの經説を踏まえ、『法華經』を聞く功德は、稱名念佛の行よりも易行であると主張する。このように、『法華經』提婆達多品の「淨心信敬」を縁邊にし、「一旦聞品ノ功」を強調して聞法と稱名念佛とを比較しているところにいささか飛躍がある。

さらに『閑邪陳善記』巻五には、經力について記している中で、難行道・易行道に論及している箇所がある。

然レトモ其段ハ法爾ナラハ法爾ノ願力トモ許スヘシ。若シ爾ラハ彌陀稱名念佛ニ願力法爾ノ道理アリテ一念・十念ノ往生ノ利益アルガ故ニ。此ノ彌陀稱名ノ他力往生法爾ノ道理ニテ易行道ト云コトヲ知ラバ、何ソ又經法法身ノ理法寶ニモ法爾ノ威力アリテ、一句一偈ノ讀誦等ニテ利益深廣ナル聖道ノ經論ノ他力易行ノ説ヲ容サザルヤ。餘經ハ且ク置ク。法華ノ序分、無量義經云、以經威力ニ故、發其信心ニ能得是經威德勢力ニ得果云云。又云、如是無上大乘無量義經、極有三大威神之力、尊無過上ニ能令諸凡夫皆成聖果、永離生死皆得自在已上。此

義教と日蓮宗・法華宗學僧との論争 ― 修行論を中心に ― (庵谷)

豈經法ニ信心起發得道得果ノ法爾ノ力アルニアラズヤ。是則聖道ノ行モ法力ニ由ルガ故ニ他力易行ノ義アリ。何ソ一概ニ自力ノ得益ナルカ故ニ難行道ナリト捨ルヤ。殊ニ能令諸凡夫ノ言、豈凡夫ノ聖道ノ利益ヲ云ニアラズヤ。胡ソ是ノ佛文ヲ疑フヤ。⁽²⁷⁾
このように、『無量義經』⁽²⁸⁾の經説により、餘經(聖道門)にも他力易行の説があり、自力の得益だから難行道ととらえることは誤りであると難じている。

四 義教著『淨土眞宗論客編』における反駁

次に『閑邪陳善記』に反駁したとされる義教の『淨土眞宗論客編』について検討する。

『淨土眞宗論客編』には、客の立場からの批判として佛力について次の評言がある。

客曰、比丘説、衆生勵身心、盡分而修善。乞救於本尊、則其佛菩薩、爲加威神力、令人滅罪增善得道。如是說者、爲眞他力。放任佛力、不加自修。謂之他力者、是妄傳而已。往生極樂亦其危哉。⁽²⁹⁾

客の主張は、衆生は身心を勵まし、なすべき務めを果たし、善を修して本尊に乞えば、神力を加えて得道することができ

るとし、これが眞の他力であつて、佛力に放任して自らは何も修行しないという説はみだらな説であるといふのである。

これに對し義教は、四句の説を設けて如來の力に依ることは他性の説であるとして否定する。『淨土眞宗論客編』には次の記述がある。

論曰、諸法本離_二四句。涅槃經云、一切無_一自相亦復無_二他相。無_一自他共相亦無_二無因相。然佛大悲爲_二利物故、隨_レ緣逗_レ機。設_二四句說。如_レ說_下諸法從_二自心生、心外無_レ法、是自性說。如_レ說_下衆生由_二聖力故、能得_レ道等、是他性說。如_レ說_下諸法從_二因緣生、是共性說。如_レ說_下諸法實相本有、是無因說。四句融妙。果竟無_二。若善解者、悉成_二甘露。若偏執者、竝成_二毒藥。且如_下行者內修_二三昧、多蒙_二佛力、見_レ十方佛。若執_下此所見境由_二心淨一故生上者、則同_二外道自性見計。若執_下由_二如來加力一故生上者、則同_二外道他性見計。若執_下由_二内外和合一故生上者、則同_二外道共性見計。若執_下此境自然生一者、則同_二外道無因性計。縱誦_二五車、逐_レ語笑曉。比丘所說。藏否可_レ知。⁽³⁰⁾

ここに典據とされている『涅槃經』には「一切法無_二自相。他相及自他相。無_二無因相。」と記されている。また、『淨土眞宗論客編』では觸れられていないが、『止觀輔行傳弘決』卷三

には「一切無_二自相亦復無_二他相。無_二自他共相亦無_二無因相。」とある。

ともかく、如來加力によるが故に生ずると執著する者は、外道他性の見計と同じであると主張して、佛力に依ることは外道であるという見方で贊同する。

さて、義教の『淨土眞宗論客編』には、修行に關して「吾祖所_レ以_レ斥_レ加_二自修功一者、爲_レ遣_下他力爲_レ不_レ嫌、別貴_二己功一之情_レ耳。非_レ謂_下放_二任佛力、勿_レ修_二三業善一矣。」⁽³¹⁾と記述している箇所がある。

このように、自力の修行による功德を斥けるのは、「他力をして心よしとせず、自らの功德を貴ぶ心」をおいやるためだけであると述べている。そして、佛力に任せて三業の善を修することを制止する、と言うのではないと主張している。すなわち、身口意三業に互る善を修することを否定はしていないのである。そこで、稱名の意義を定めている箇所として次の資料を確認する。

義教著『淨土眞宗論客編』には次の記述がある。

客曰、或說、念佛六字、密教則有_二一字眞言。持者滅_レ罪、得_レ生_二淨土。若約_二易稱、眞言爲_レ勝。法然貶_レ之。攝_レ屬_二雜行。豈非_二邪見謗法者。又稱_二佛名一是易。斷疑立信是

難。然淨土門、不_レ度_二疑者_一。固候_二斷疑_一。豈非_二難行_一云云。此難如何。

論曰、若人不能稱名、唯聞佛名、願生則得。故大經云、其佛本願力、聞名欲往生、皆悉到彼國。自致不退轉。善導釋云、稱念彌陀、下至十聲・一聲・一念、必得往生。所言一念者、意願往生耳。然則不强假衆生口稱行。易行臻極。何法如之。故勸堪稱名者、稱念佛恩焉。⁽³⁴⁾

ここでは、密教における一字真言と念佛の六字を比較し、より唱えやすい方は真言であるとの批判に對し、「若人不能稱名、唯聞佛名、願生則得。」と主張し、稱名を唱えることができる者は、ただ阿彌陀佛の名を聞き往生を願うだけでよいと判断している。さらに『無量壽經』⁽³⁵⁾と善導の『往生禮讚』⁽³⁶⁾に基づいて、「一念」について觸れ、その上で、一念とは心に往生を願うのみであり、強いて衆生が口に唱えることには依らないと説く。そして、あながちに用いることはなく、易行の究極の至りであるとし、稱名念佛は佛恩に報いるためであると述べている。

五 『決權實義』における修行論

『淨土真宗論客編』に反駁した著作として『決權實義』がある。先に『決權實義』の著作について検討する。『決權實義』の著者を光圓日相とするものとしては、『國書總目録』・『日蓮宗宗學章疏目錄』・執行海秀著『日蓮宗教學史』がある。また、遠壽日珠の著作であるとするものとしては、稻田海素稿「日蓮宗宗論書解題」・山口晃一編『日蓮教學全書』の解題・『眞宗全書』卷六二「淨土眞宗論客編」の解題である。さらに、著者を日蓮宗贗徒とするものとして、『淨土眞宗教典志』がある。

ところで、『決權實義』の跋文には「遠壽院日珠藏」と記されていて、「決權實義は蒙が知己が暇日所綴」とある。したがって、遠壽日珠が自分の知り合いが書いたとするからには、著者は遠壽日珠とは考えられない。但し、版本の著書には著者名は記していない。したがって、本稿では執行海秀著『日蓮宗教學史』に基づき、光圓日相の著作であると推定する。

さて、『決權實義』における修行について、その記述を確認すれば次のとおりである。

吾祖所據、以_レ題爲_レ要、是亦無_レ他、準_二付屬_一故、應_二下

根二故。吾祖、所謂餘經。法華經、無_レ詮但可_レ南無妙法蓮華經一是也。故爲_レ助行、雖_レ誦_レ一部、以_レ別攝_レ惣、與爲_レ題目_レ讀_レ誦_レ之_レ者。故誦_レ一部、即行_レ題目。以_レ題爲_レ本是故爾耳。偉哉、至哉。雖_レ但讀_レ誦一字・一文、即誦_レ一部。所以者何、句句之下通結_レ妙名。妙有_レ多奇。具足其_レ一。³⁷⁾

ここでは、末法においては餘經も『法華經』もなく、但だ南無妙法蓮華經のみであるという日蓮の「上野殿御返事」(法要書)³⁸⁾の一文を引き、題目が全てを包括し、題目を唱えれば『法華經』の一部を誦したことになるのであると思料している。

その根拠として「句句之下通結_レ妙名。」という『法華文句記』の説を用いる。これは『法華文句記』卷一(釋序品)「妙法之唱非_レ唯正宗。二十八品俱名_レ妙故、故品品之内咸具_レ體等、句句之下通結_レ妙名。」からの引用である。妙の中に様々な意味が含まれているという典拠を示しているのである。

同様の主張は『決權實義』の次の記述にも確認できる。

如來一切所有之法、如來一切自在神力、如來一切祕要之藏、如來一切甚深之事、皆攝_レ五字。撮_レ其樞要、而授_レ與之。一部之要、豈過_レ於此。略舉_レ經題、玄收_レ一部。故若有_レ人、唱_レ此要題、乃至一遍、則誦_レ一部。所以者何、

斯付囑者、佛垂_レ大悲、爲_レ末法最下根群生、惣攬_レ一部、含收_レ玄名、付_レ之本化、令_レ其流通。既以_レ一部、卷攝_レ五字、授_レ與我等。故唯一遍、則誦_レ一部。大悲所致、不_レ亦宜_レ乎。一遍尙尔、況復數遍。有_レ斯德故、末法愚輩、唯唱_レ題目、諸惡永滅、萬德頓歸、出_レ離生死、決成_レ佛道。故至_レ品終、說_レ是人曰、於我滅度後、應受持斯經、是人於佛道、決定無有疑。⁴⁰⁾

まず『法華經』如來神力品の經文を引用して、『法華經』の一部(『法華經』八卷二八品のすべて)は皆咸く「妙法蓮華經」の五字に含まれるとする。したがって、この題目を一遍でも唱えることは、『法華經』の全てを唱えたことになるのである。それゆえ、末法の凡夫は唯だ題目を唱えれば、諸の悪は永く滅し、あらゆる徳が速やかに歸結し、生死を出離して、佛道を成ずることができると敘述している。

さらに、題目に含まれる佛の功德について述べている箇所として、『決權實義』には次の記述がある。

然於_レ壽量從_レ遠劫來、積功累德法性智應、及戒定慧解脫知見、六度・十度、諸波羅蜜、因位萬行、果上萬德、色香美味皆悉具足、攝飾和合、爲_レ一良藥、今留在_レ此。我高祖云、是好良藥者、壽量品肝要名體宗用教南無妙法

蓮華經也已上。妙法五字、所_レ含功德、此品顯說。分別已下、勸_レ將此之妙法功德。若聞_二遠壽_一、一念信解、勝_二五波羅蜜行_一百千萬億倍。何故得_レ然。雖_レ言_二一念、信_二遠壽_一、故、其_二念具_二遠劫佛德_一。其佛德者、五百塵點復倍上數、因行果德之功德也。故勝_二八十萬億那由多劫間五波羅蜜行_一、百千萬億倍。⁽⁴²⁾

ここでは日蓮の『觀心本尊抄』⁽⁴³⁾の文を引用して、妙法五字は壽量品の肝要であり、釋尊の因行と果德の功德が皆悉く具足していることを明かし、その壽量品（久遠壽量）を聞いて一念信解すれば、久遠の佛德を具すると記している。ここには『法華經』如來壽量品における良醫治子喻の經説が根底にあることはいうまでもない。⁽⁴⁴⁾

また、一念信解とは『法華經』分別功德品⁽⁴⁵⁾に説かれる經説であり、一念信解を含む四信五品は日蓮教學では重要な述語とされている。四信とは、一念信解・略解言趣・廣爲他說・深信觀成をいう。また、五品とは、隨喜品・讀誦品・說法品・兼行六度品・正行六度品をいう。五品については『摩訶止觀』卷七下に次の記述がある。

正信堅固無_二能移動_一、此名_二深信隨喜心_一。即初品弟子位也。分別功德品云、其有_二衆生_一、聞_二佛壽命長遠_一。乃至能

義教と日蓮宗・法華宗學僧との論争 — 修行論を中心に — (庵谷)

生_二一念信解_一、所_レ得功德、不_レ可_二限量_一。能起_二如來無上之慧_一。若聞_二是經而不_二毀_レ些_一起_二隨喜心_一。當_レ知、已爲_二深信解相_一。即初品文也。(中略)若爾、五品之位在_二十信前_一。若依_二普賢觀_一、即以_二五品爲_二十信五心_一。但佛意難_レ知、赴_レ機異_レ說。借_レ此開_レ解。何勞苦諍云云。⁽⁴⁶⁾

このように『摩訶止觀』では、五品を重視して『法華經』分別功德品における一念信解を五品の内の初品に配當している。

一方、日蓮の場合は、四信の第一である一念信解と、五品の初である隨喜品を重く見ている。日蓮の『四信五品鈔』には次の記載がある。

分別功德品四信與_二五品_一、修_二行法華_一之_二大要_一。在世滅後之_二龜鏡也_一。荆谿云、一念信解者、即是本門立行之首云云。其中現在四信之初一念信解與_二滅後五品第一初隨喜_一、此二處一同百界千如・一念三千寶篋、十方三世諸佛出門也。天台・妙樂二聖賢定_二此二處位_一有三釋。所謂或相似十信鐵輪位。或觀行五品初品位、未斷見思。或名字即位也。止觀會_二其不定_一云、佛意難_レ知、赴_レ機異_レ說。借_レ此開_レ解。何勞苦諍云云等。豫意云、三釋之中、名字即者叶_二經文_一。歟。滅後五品初一品說云、而不_二毀_レ些_一起_二隨喜心_一。若此

文渡^二相似・五品、而不毀^レ皆言^レ不便歟。就中、壽量品失心・不失心等皆名字即也。涅槃經若信若不信乃至熙連。勘^レ之。又一念信解四字之中、信一字四信居^レ初、解一字被^レ奪、後故也。若爾者、無解有信當^レ四信初位。經說^二第二信^一云、略解言趣云云。記九云、唯除^二初信^一無^レ解故。隨次下至^二隨喜品^一、上初隨喜重分^二明之^一。五十人是皆展轉劣也。至^二第五十人^一有^二三釋^一。一謂、第五十人初隨喜内也。二謂、第五十人初隨喜外也云者名字即也。教彌實、位彌下云釋此意也。自^二四味三教^一圓教攝^レ機、自^二爾前圓教^一法華經攝^レ機、自^二迹門^一本門盡^レ機也。教彌實位彌下六字留^レ心可^レ案。⁽⁴⁷⁾

分別功德品に説かれる四信と五品は、『法華經』を修行する上で重要であると捉える。そして天台・傳教には相似即・觀行即・名字即の三釋があるが、『摩訶止觀』に記されている通り、佛意は知りがたく機根に應じて異なつて説くため定まつていないと釋した上で、日蓮は名字即こそが經文に叶うと説く。分別功德品の「一念信解」の四文字の中の「信」の一字は四信の初信に配當され、「解」の一字は後に配當されるのである。「無解有信」は四信の初位に當たるのである。さらに「教彌實位彌下」と示し、教えがますます眞實に近づけば、階

位はますます下の位になると説く。石川海典著「日蓮聖人御遺文講義」ではこの用語の説明として「高山の水は深谷に注ぐの力あり、日中の太陽は幽谷を照らすの道理で、最高の宗教は最悪の衆生を教化する力あること」と記している。⁽⁴⁸⁾

ところで、先の『淨土眞宗諭客編』においては、「一念とは心に往生を願う」としていたことに對し、『決權實義』では「遠壽を聞いて信じる」ことにより「一念に久遠の佛徳を具する」と捉えている。そこで次に「一念」に關して考察することにする。

まず『摩訶止觀』卷五には一念三千について次のように記されている。

夫一心具^二十法界^一、一法界又具^二十法界^一・百法界。一界具^二三十種世間^一。百法界即具^二三千種世間^一。此三千在^二一念心^一。若無心而已。介爾有心即具^二三千^一。⁽⁴⁹⁾

ここに「介爾有心」という記述が確認される通り、一念とは非常に微弱な心であると考えられる。また、『止觀輔行傳弘決』卷五では、「言介爾者、謂利那心。」⁽⁵⁰⁾「介爾者、介者弱也。詩云、介爾景福謂細念也。」⁽⁵¹⁾「介者助也。助謂微弱之念。」⁽⁵²⁾「念者謂介爾。」と解釋されているように、一念とは微弱であり、利那の心をさすのである。日蓮は『總在一念抄』

において「介爾者、妙樂釋云、謂細念也云云。意はわずかにと云也。」⁽⁵⁴⁾と記述していることから、「わずかに」と理解していることがわかる。

『決權實義』における一念に日蓮の解釋を用いれば、「わずか」といっても遠壽を信じて、そのわずかな心に久遠の佛徳を具する」と解讀することができる。

六 義教著『輪駁行藏錄』における反駁

『決權實義』に反駁した著書に義教の『輪駁行藏錄』がある。『輪駁行藏錄』は、日蓮教學を踏まえて、それに反對する陳述をしている。まず論駁の手掛りとなった『法華經』法師品の經文を確認する。

『法華經』法師品には「須臾聞之、即得究竟阿耨多羅三藐三菩提。」⁽⁵⁵⁾とあり、また「咸於佛前、聞妙法華經一偈・一句、乃至一念隨喜者、我皆與授記。當得阿耨多羅三藐三菩提。」⁽⁵⁶⁾とある。

これら『法華經』法師品における聞法の功德に對し、『輪駁行藏錄』卷二では『法華文句記』と『摩訶止觀』を引用して次のように記している。

汝依此文、計凡愚人但聞法華一偈・一句、由經力

義教と日蓮宗・法華宗學僧との論争 ― 修行論を中心に ― (庵谷)

故即作佛焉。經旨不爾。故妙樂記八之一云、此中容用別時意趣。是故應須以聞約修行、廣明供養、宣通益他、內觀具足。具如止觀。豈可端拱唯仰初心。止觀七之三云、一一句偈、如聞而修、入心成觀。觀與經合、觀則有印。印心作觀、非數他寶。此乃揀非愚癡但聞。

先の『法華經』法師品の經説により、凡夫はただ『法華經』の一偈・一句を聞くだけで、經力によって作佛することができると考えているようであるが、經の主旨はそのようではなく、『法華文句記』卷八、釋法師品における「此中容用別時意趣。是故應須以聞約修行、廣明供養、宣通益他、內觀具足。具如止觀。豈可端拱唯仰初心。」⁽⁵⁸⁾という箇所と『摩訶止觀』卷七における「一一句偈、如聞而修、入心成觀。觀與經合、觀則有印。印心作觀、非數他寶。」⁽⁵⁹⁾という箇所では、凡そ「聞の如く修行しなければならぬ」と説いている。したがって、愚癡の者は單に經を聞けば良いとする説は否定する。

さらに『輪駁行藏錄』は『涅槃經』の經文をもって修行の必要性を重ねて主張する。『涅槃經』(北本)卷二四、光明遍照高貴徳王菩薩品には次のように記されている。

若人聞我説大涅槃一字一句、得阿耨多羅三藐三菩提者、汝於是義猶未了了。汝當諦聽、吾當爲汝更分別之。善男子。若有善男子・善女人、聞大涅槃一字一句、不_レ作_二字相_一、不_レ作_二句相_一、不_レ作_二聞相_一、不_レ作_二佛相_一、不_レ作_二說相_一。如是義者、名無相相。以無相相故、得阿耨多羅三藐三菩提。⁽⁶⁰⁾

このように「汝於是義猶未了了。」と説かれ、説を聞くのみでは不十分であるとする。また『涅槃經』卷二五（北本）光明遍照高貴德王菩薩品には次のように記されている。

不_三以_レ聞故得_二大涅槃_一。以_二修習_一故、得_二大涅槃_一。善男子。譬如_レ病人雖_レ聞_二醫教及藥名字_一、不_レ能_レ愈_レ病、以_二服食_一故、能_レ得_二差_レ病_一。雖_レ聽_二十二深因緣法_一、不_レ能_レ得_二斷_一。一切煩惱。要以_二繫念善思惟_一故能_レ得_二除斷_一。⁽⁶¹⁾

ここには、聞くことで大涅槃を得るのではなく、修習をすることで大涅槃を得ることができると説いている。

これらの經説に基づき、『輪駁行藏錄』卷二では日蓮教團が聞法の功德を強調することに對して「此豈非_レ害_二汝計_一者耶。」⁽⁶²⁾と評言している。

さらに「又汝黨計_レ具縛凡愚、不_レ修_二觀行_一、唯唱_二妙名_一速成_レ菩提。」⁽⁶³⁾と_レ言及して、日蓮教團が、具縛の凡夫は觀行を修行し

なくとも、ただ題目を唱えれば速やかに菩提を成ずることができると主張していることに對して『摩訶止觀』と『法華文句記』をもつて批判している。

『摩訶止觀』卷二には次の記述がある。

欲_レ登_二妙位_一、非_レ行_二不_レ階_一。善解鑽搖、醍醐可_レ獲。法華云、又見_レ佛子修_二種種行_一、以求_レ佛道。行法衆多。略言_二其四_一。一常坐。二常行。三半行半坐。四非行非坐。⁽⁶⁴⁾

ここに「欲_レ登_二妙位_一、非_レ行_二不_レ階_一。」とあるように、行でなければ階位を登ることはできないと記されている。また『法華文句記』卷五、釋方便品には次の記述がある。

以_二一實觀_一・一大弘願_レ體_レ之道_レ之。若不_レ然者、徒云_レ說_レ開。若不_レ觀者、則應_二善體自至_一菩提。何須_二更修_一菩提行願。⁽⁶⁵⁾

ここでは、もし觀行を修することがなければ菩提に至ることがあるうか。どうして更に菩提の行願を修することがあるうかと説かれている。

これら『摩訶止觀』と『法華文句記』の説に依り、『輪駁行藏錄』卷二には次のように記されている。

若有_二唱題成佛文理_一、天台何慳_レ不_レ傳化_レ他、乃故說_レ妙位非_レ觀行_二不_レ階_一、妙樂何言_レ若不_レ觀者、善體自至_二菩提_一、

何須⁽⁶⁶⁾更修⁽⁶⁶⁾苦提行願⁽⁶⁶⁾。

この『輪駁行藏錄』の記述においては、唱題成佛の文理はないとの結論に達しているのである。

さらに日蓮の『唱法華題目鈔』・『顯謗法鈔』・『初心成佛鈔』の各遺文を批判の対象として用い、日蓮自らの説として唱題成佛の義はないと言及する。

すなわち、『唱法華題目鈔』の「法華經を信じ侍るは、させ解なければども三惡道には墮べからず候。六道を出る事は一分のさとりなからん人は難⁽⁶⁷⁾有侍るか。」、『顯謗法鈔』の「末代濁世には當機にして初住の位に入べき人は萬に一人もありがたかるべし。」⁽⁶⁸⁾という、六道を出るにはさとりが必要であり、末代濁惡世には初住に入ることが出来る者はほとんどいないとの趣旨を記した箇所を抜粋し、また『初心成佛鈔』の次の記述を取り上げている。

問云、無智の人も法華經を信じたらば即身成佛すべき歟。又何の淨土に往生すべきぞや。

答云、法華經を持においては、深く法華經の心を知り、止觀の坐禪をし一念三千・十境・十乘の觀法をこらさん人は、實に即身成佛し解を開く事も有べし。⁽⁶⁹⁾

このように『初心成佛鈔』における、止觀の坐禪をして一

義教と日蓮宗・法華宗學僧との論争 — 修行論を中心に — (庵谷)

念三千・十境・十乘の觀法を行じなければ即身成佛し、さとりを開くことはできないとの記載を念頭に、『輪駁行藏錄』卷二には次のように記している。

此文豈非日蓮自害唱題成佛義耶。汝宗命脉斷續在⁽⁷⁰⁾此。汝先須⁽⁷⁰⁾公直會⁽⁷⁰⁾這箇要事、以論⁽⁷⁰⁾其徒疑惑迷心⁽⁷⁰⁾、然後議⁽⁷⁰⁾他、其未⁽⁷⁰⁾晚也⁽⁷⁰⁾。

このように、日蓮自らの言葉をもって唱題成佛の義はないと論及するするのである。では、義教の説では修行はどのように行うべきか、このことについて所述した箇所を確認する。『輪駁行藏錄』は次の『普賢觀經』における「一切業障海、皆從⁽⁷¹⁾妄⁽⁷¹⁾想⁽⁷¹⁾生。若欲⁽⁷¹⁾懺悔⁽⁷¹⁾者、端坐念⁽⁷¹⁾實相。衆罪如⁽⁷¹⁾霜露、慧日能消除。」という經文に立脚している。さらに、この端坐して實相を念ずることを原則としている『普賢觀經』の説を基として、『輪駁行藏錄』卷三には「若不⁽⁷²⁾堪⁽⁷²⁾此理懺⁽⁷²⁾、須⁽⁷²⁾就⁽⁷²⁾事行易⁽⁷²⁾修。」と記されている。すなわち、端坐して實相を念ずることができない者は、修しやすすい行を修せばよい、という寛容な態度を見せているのである。

その典據として『大乘造像功德經』の次の經文を用いている。

若彼衆生、法說⁽⁷³⁾非法、非法說法。唯以⁽⁷³⁾口言⁽⁷³⁾而不⁽⁷³⁾壞⁽⁷³⁾

見。後生^二信樂^一、造^二佛形像^一、此先惡業、但於^二現身^一、而受^二輕報^一、不^レ墮^二惡道^一。然於^二生死^一、未^レ即解脫^一。

このように、信じ願う心を生じて、佛の像を造れば、惡道に墮することは無い。ただし、未だ即ち解脫しないとの『大乘造像功德經』を参考にして、次のように論じている。

『輪駁行藏錄』卷三には次の記述がある。

生^レ信造^レ像、唱題誦經、罪滅福漸成、終歸^二一解脫^一。吁我與^レ汝、性本非^レ疎、今日立破亦即實相。鹿言軟語、歸^二第一義^一、同證^二妙乘^一、不^二亦悅^一乎。

ここでは、信を生じ佛像を造り、唱題・誦經すれば、罪は滅し、福は漸く成じ、終には一解脫に歸することができる。『大乘造像功德經』の説を伸長し、さらに、『決權實義』の主張も、義教の主張も、全くかけ離れたものではなく、突き詰めれば「第一義に歸し、同じく妙乘を證す。」と説き、一往の決着を摸索している。

ところで、『輪駁行藏錄』には、肉食に關して次の記述がある。

不^レ知^下聽^二淨肉^一、通^中涅槃時^上之失。涅槃制^レ肉、約^二持律人^一。然隨^二機宜^一、聽^二淨肉^一、事、猶通^二涅槃制肉^一已^後。

ここでは、肉を制するのは持律の人の觀點に立つてのこと

であり、機根に應じて肉を許すことは涅槃制肉の後に通じることであると認識している。その根據として『大乘入楞伽經』卷六、斷食肉品の「象脇與^二大雲^一・涅槃・央掘摩及此楞伽經、我皆制^レ斷肉^一。」並びに『入楞伽經』卷八、遮食肉品の「象腋與^二大雲^一・涅槃・勝鬘經及入楞伽經、我不^レ聽^二食肉^一。」の經文を提示する。

ここに『涅槃經』も列擧されていることから、それぞれの『楞伽經』の説は涅槃の後に存すると解釋する。

また同様に『文殊師利問經』卷一、菩薩戒品には次の經文がある。

爾時文殊師利、復白^レ佛言、世尊。若得^二食肉^一者、象龜經・大雲經・指鬘經・楞伽經等諸經、何故悉斷。佛告^二文殊師利^一、如^二深廣江不^レ見^二彼岸^一。若無^二因緣^一、則不^レ得^レ渡。若有^二因緣^一、汝當^レ渡不^レ。文殊師利白^レ佛言、世尊。我當^レ渡。我當^レ渡^三或以^レ船^一、或以^レ筏、或以^二餘物^一。佛復告^二文殊師利^一、以^二衆生無^レ慈悲力^一、懷^二殺害意^一。爲^二此因緣^一故斷^二食肉^一。文殊師利。有^二衆生樂^二糞掃衣^一、我說^二糞掃衣^一。如是^レ乞食。樹下坐^二露地^一、坐^二阿蘭若塚間^一、一食過時不^レ食、遇得^二住處^一三衣等^一。爲^レ教^二化彼^一、我說^二頭陀^一。如是。文殊師利。若衆生有^二殺害心^一、爲^二彼心^一故當^レ生^二無數罪

過。是故我斷_レ肉。若能不_レ懷_二害心_一、大慈悲心、爲_レ教化一切衆生、故無_レ有_二過罪_一。⁽⁷⁹⁾

この記述に基づいて、「文中列_二擧楞伽經_一者、此標_二此經聽淨肉_一事、猶通_二涅槃楞伽制後_一」⁽⁸⁰⁾と解釋している。すなわち『楞伽經』が列擧されていることから、『涅槃經』は『楞伽經』の後に通じると捉えているのである。したがって、肉食は許されるという理解を示している。また、戒を破することについては、『涅槃經』を典據に論を展開している。

『涅槃經』卷一一（北本）聖行品には次の經文がある。

若有_二菩薩_一知_二以_二破戒因緣_一、則能令_二人受_二持愛_一樂大乘經典、又能令_二其讀誦_一・通利_一・書_二寫經卷_一、廣爲_レ他說、不退_二轉於阿耨多羅三藐三菩提_一、爲_レ如是故、故得_二破戒_一。菩薩、爾時應_レ作_二是念_一。我寧_一劫、若減_一劫、墮_二於阿鼻地獄_一受_レ罪、要必當_レ令_二如是之人_一、不_レ退_二轉於阿耨多羅三藐三菩提_一。迦葉。以_二是因緣_一、菩薩摩訶薩得_レ毀淨戒。爾時文殊師利菩薩摩訶薩、白_レ佛言、世尊。若有_二菩薩_一、攝_二取護_一持_二如是之人_一、令_二不_レ退於_二菩提之心_一、爲_レ是毀_レ戒、若墮_二阿鼻_一、無_レ有_二是處_一。⁽⁸¹⁾

ここでは、阿耨菩提のためには戒を破すこともあるという趣旨が述べられている。この『涅槃經』を基に、『輪駁行藏錄』

義教と日蓮宗・法華宗學僧との論争 ― 修行論を中心に ― (庵谷)

では次のように陳述している。

此爲_二大益_一、猶聽_二破戒_一。況食_二淨肉_一、非_二是性罪_一。其隨_二機宜_一、聽_二淨肉_一事、通_二涅槃時_一文理炳然。論客編言_二開遮隨_レ緣、四句逗_レ機、不_レ可_二偏執_一者斯義也。自力教門尙爾。況佗力濟_二凡道_一。⁽⁸²⁾

義教は、大益のためには破戒は許され、肉を食することもそれに含まれると論及し、先の『淨土眞宗論客編』において「開遮隨緣、四句逗機、不_レ可_二偏執_一。」⁽⁸³⁾と述べたことはこのことであると結論付けている。

以上、『輪駁行藏錄』における記述を確認すると、「吁我與_レ汝、性本非_レ疎、今日立破亦即實相。龜言軟語、歸_二第一義_一、同證_二妙乘_一不_二亦悅_一乎。」⁽⁸⁴⁾という主張や「開遮隨緣、四句逗機、不_レ可_二偏執_一。」⁽⁸⁵⁾という論評があり、日蓮門下の學僧の文獻には見られない柔軟な發言を讀み取ることができる。

七 おわりに

以上、蓮華日題著『閑邪陳善記』・義教著『淨土眞宗論客編』・光圓日相著『決權實義』・義教著『論駁行藏錄』の記述から論争における修行に関する記載について確認した。

このことから、蓮華日題の『閑邪陳善記』では、『法華經』

方便品の經説により、佛が修行し、悟りを得たことと同様に、一切衆生にも同じく修行し、佛道を成ぜしめるとの本誓があることを明示し、衆生の修行が佛々道同・五佛道同の修行であることを説示している。

また、『法華經』の功德と稱名とを比較した箇所では、『法華經』提婆達多品における、聞法の功德により十方の佛前に生まれ、蓮華より化生するとの經説を踏まえて、『法華經』聞法の功德は、稱名念佛の行よりも易行であると主張する。

義教の『淨土眞宗論客編』は、自力の修行による功德を斥けるのは、あくまでも「他力をして心よしとせず、自らの功德を貴ぶ心」をおいやるためだけであり、佛力に任せて三業の善を修してはいけないと言うのではないとする。

また、「一念」とは心に往生を願うのみであり、強いて衆生が口に唱えることには依らず、稱名することは佛恩に報いるためであると主張している。

次に、光圓日相の『決權實義』では、題目が全てをおさめ、あるいは、妙法五字は壽量品の肝要であり、釋尊の因行と果徳の功德が皆悉く具足していることを明かし、その壽量品(久遠壽量)を聞いて一念信解すれば、その久遠の佛徳を具すると記している。

「一念」に對する語義の對比では、『淨土眞宗論客編』においては、一念とは心に往生を願うとしていたことに對し、『決權實義』では遠壽を聞いて信じることににより、一念に久遠の佛徳を具すると捉えている。

義教の『輪駁行藏錄』においては、『決權實義』に論駁を加えている中で、修行も必要であると述べ、單に經を聞けば良いとする説は否定するのである。

一方『大乘造像功德經』を用いて、「論じ極まれば、性本疎にあらず。」「同じく妙乘を證せんこと、また悦ばしからんや。」と説き、この論争に對して共通點を探り、一往の解決を見ようと試みていて、唱題と稱名念佛はそれぞれ第一義に歸すとの互讓の觀點から和解を促している態度も讀み取れる。

また、『閑邪陳善記』・『決權實義』において、修行に關する教理が確認できた。

先に見たとおり、執行海秀氏は『日蓮宗教學史』において「當時のわが教學は、徒に權實・本迹の教判のみに終始し、教理の内容や實踐面等の宗旨の本義については看過されていた。」と評していたが、本稿において確認した資料には修行に關する記述も見られたことから、看過されていたとは一概には言いがたいと考えられる。

以上、日蓮宗の教學史を検討するに当たっては、各々の學僧の著作ごとに研究することもさることながら、互いに論争した對象にも目を向けてそれぞれの理論をも明確にする必要があると考える。

註

- (1) 執行海秀著『日蓮宗教學史』(平樂寺書店、一九九六年(第十二刷)二九六頁。
- (2) 論争の流れについては執行海秀著『日蓮宗教學史』がある。著者に關しては鷲尾順敬編『日本佛家人名事典』増訂再版(東京美術、一九〇三年)を參考にした。著書については、妻木直良編『眞宗全書』(藏經書院、一九一四年)・山口晃一編『日蓮教學全書』(法華ジャーナル、一九七七)・一九八七年)・日蓮教學研究所編『日蓮宗學章疏目錄改訂版』(東方出版、一九七九年)・日蓮宗事典刊行委員會編『日蓮宗事典』(東京堂出版、一九八一年)・『日本佛教典籍大事典』(雄山閣出版、一九八六年)・望月歎厚著『日蓮宗學說史』(平樂寺書店、一九八八年)・稻田海素稿『日蓮宗論書解題』(『大崎學報』一三)・一五號、一九一〇年)に解説がある。
- (3) 池上本門寺編『日蓮宗寺院大鑑』(池上本門寺、一九八一年)によれば、熊本市本妙寺の末寺とある。
- (4) 稻田前掲論文。『大崎學報』一三號。
- 義教と日蓮宗・法華宗學僧との論争 — 修行論を中心に — (庵谷)
- (5) 三五丁右。
- (6) 『邪正問答』卷下・二九丁左。
- (7) 五九一頁。
- (8) 四九七頁。
- (9) 五九一頁。
- (10) 七一〇頁。
- (11) 六二三頁。
- (12) 一〇四頁。
- (13) 二丁右。
- (14) 『日蓮教學全書』一一・六七丁左。
- (15) 義教については『眞宗僧寶傳』二(新編『眞宗全書』史傳編四・四九九頁)に詳述されている。また、龍谷大學編『龍谷大學三百年史』(龍谷大學出版部、一九三九年)・本願寺史料研究所編『本願寺史』二(浄土眞宗本願寺派宗務所、一九六八年)・富山別院開創百周年記念出版會編『學國越中』(永田文昌堂、一九八四年)・富山別院開創百周年記念出版會編『越中念佛者の歩み』(永田文昌堂、一九八四年)がある。さらに、『眞宗全書』(六〇・四頁)に『浄土眞宗論客編』の解題がある。
- (16) 富山縣氷見市幸町。高野山眞言宗。
- (17) 『眞宗全書』六〇・二八八頁。
- (18) 『日蓮教學全書』一七・一二二頁。
- (19) 『眞宗人名辭典』(法藏館、一九九九年)八一頁。

(20) 『日蓮教學全書』一七・一二二頁。

(21) 二六丁左・二七丁右。

(22) 大正九・九頁中。

(23) 大正九・三九三頁上。

(24) 大正一二・六二七頁下。『涅槃經』卷四(北本)如來性品(大正一二・三八七頁下)。

(25) 五五丁右。

(26) 『法華經』提婆達多品(大正九・三五頁上)には「佛告諸比丘、未來世中、若有善男子・善女人、聞妙法華經提婆達多品、淨心信敬、不_レ生疑惑者、不_レ墮地獄・餓鬼・畜生、生_{三十}十方佛前。所生之處、常聞此經。若生_{三人}天中、受_二勝妙樂、若在_二佛前、蓮華化生。」とある。

(27) 三二丁左。

(28) 『無量義經』十功德品(大正九・三八八頁中)には「以_レ經威力故、發_二其人心、欸然得_レ迴。信心既發、勇猛精進故、能得_二是經威德勢力、得道得果。」とある。また同經(三八九頁上)には「如_レ是無上大乘無量義經、極有_二大威神之力、尊無_二過上。能令_レ諸凡夫、皆成_二聖果、永離_二生死、而得_レ自在。」とある。

(29) 『眞宗全書』六〇・二八三頁上。

(30) 同右。

(31) 『涅槃經』卷三六(南本)、大正一二・八五一頁下。また『涅槃經疏』卷七(大正三八・七八頁下)には「若因自是因、果自

是果、則墮_二自性。由因故果、由果故因、則墮_二他性。因果因緣故因、因果因緣故果、則墮_二共性。非因非果故因果、墮_二無因性。皆墮_二斷常。」とある。

(32) 大正四六・二三八頁上。

(33) 『眞宗全書』六〇・二八三頁上。

(34) 『眞宗全書』六〇・二九六頁上下。

(35) 『佛說無量壽經』大正一二・二七三頁上。

(36) 『往生禮讚偈』大正四七・四四八頁上。

(37) 二七丁左・二八丁右。

(38) 定遺一四九二頁。

(39) 大正三四・一五一頁下。

(40) 五二丁右左。

(41) 『法華經』如來神力品(大正九・五二頁上)には「以_レ要言_レ之、如來一切所有之法、如來一切自在神力、如來一切祕要之藏、如來一切甚深之事、皆於_二此經_一宣示顯說。」とある。

(42) 五〇丁左・五一丁右。

(43) 定遺七一六頁。

(44) 『法華經』如來壽量品(大正九・四三頁上)には「父見_二子等苦惱如是、依_レ諸經方、求_二好藥草色・香・美味皆悉具足、攝和合、與_レ子令_レ服。而作_二是言。此大良藥色・香・美味皆悉具足。汝等可_レ服。速除_二苦惱、無_レ復衆患。中略汝等當_レ知。我今衰老、死時已至。是好良藥、今留在_レ此。汝可_二取服。勿_レ憂_レ不差。」とある。

- (45) 『法華經』分別功德品(大正九・四四頁下)には「爾時佛、告彌勒菩薩摩訶薩。阿逸多。其有衆生、聞佛壽命長遠如、是。乃至能生一念信解、所得功德、無有限量。若有善男子・善女人、爲阿耨多羅三藐三菩提故、於八十萬億那由他劫、行五波羅蜜。檀波羅蜜・尸羅波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜。除般若波羅蜜。以是功德、比前功德、百分、千分、百千萬億分、不及其一、乃至算數・譬喻所不能知。若善男子・善女人、有如是功德、於阿耨多羅三藐三菩提退者、無有是處。」とある。
- (46) 大正九・九八頁下〜九九頁上。
- (47) 定遺一二九五頁。
- (48) 三六三頁。
- (49) 大正四六・五四頁上。
- (50) 大正四六・二九五頁下。
- (51) 大正四六・二九六頁上。
- (52) 大正四六・三〇二頁上。
- (53) 同右。
- (54) 定遺八二頁。
- (55) 大正九・三一頁上。
- (56) 大正九・三〇頁下。
- (57) 『日蓮教學全書』續宗論部一八・二六七頁。
- (58) 大正三四・三〇五頁中。
- (59) 大正四六・九八頁上。「非數他寶。」については、六十『華嚴經』卷五(大正九・四二九頁上)参照。
- (60) 大正一二・五〇五頁上中。
- (61) 大正一二・五一頁上。
- (62) 『日蓮教學全書』續宗論部一八・二六八頁。
- (63) 同右。
- (64) 大正四六・一一頁上。
- (65) 大正三四・二四四頁中。
- (66) 『日蓮教學全書』續宗論部一八・二六九頁。
- (67) 定遺一八八頁。
- (68) 定遺二六〇頁。
- (69) 定遺一四二六頁。
- (70) 『日蓮教學全書』續宗論部一八・二六九頁。
- (71) 大正九・三九三頁中。
- (72) 『日蓮教學全書』續宗論部一八・三四九頁。
- (73) 大正一六・七九四頁中下。
- (74) 『日蓮教學全書』續宗論部一八・三四九頁。
- (75) 『日蓮教學全書』續宗論部一八・四〇九頁。
- (76) 大正一六・六七二頁下。
- (77) 大正一六・五六四頁中。
- (78) 『輪駁行藏錄』卷三、『日蓮教學全書』續宗論部一八・四〇九頁。
- (79) 大正一四・四九三頁上。
- (80) 『日蓮教學全書』續宗論部一八・四一〇頁。

東洋の思想と宗教 第三十二號

(81) 大正二二・四三四頁下。

(82) 『日蓮教學全書』續宗論部一八・四一〇頁。

(83) 『淨土眞宗論客編』、『眞宗全書』(六〇・二八三頁上)には「隨緣逗機。設四句。」とある。

(84) 『日蓮教學全書』續宗論部一八・三四九頁。

(85) 『日蓮教學全書』續宗論部一八・四一〇頁。

〈キーワード〉義教、日蓮、『淨土眞宗論客編』、『輪駁行藏錄』